



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報

第20号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2022 年 3 月 25 日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

同窓会会長 挨拶

高橋 大厚

(国際文化研究科長・言語科学研究講座教授)

国際文化研究科同窓会会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。2年前に発行された同窓会会報第18号の挨拶で、新型コロナウイルス感染症の流行の兆しが見えていますと述べました。昨年発行された第19号では、令和2(2020)年度に国際文化研究科が同感染症のパンデミックにどのように対応し、どのような取り組みを行なったかを紹介しました。この文章を書いている令和4(2022)年3月になっても、パンデミックの終わりは見えていません。

私たちは、新型コロナウイルスとともにある、いわゆるウィズ・コロナの生活を過ごしています。国際的な人の往来が制限され、国際文化研究科でも令和4(2022)年3月時点で30数名の学生が日本への入国を待っている状態です。令和2(2020)年度に制定した在外修学制度(日本国外にあっても授業をオンライン等で履修し単位を取得することができる制度)により、物理的な距離の制約はだいぶ緩和されているのですが、それでもやはり国外にいる学生にとって異文化を体験し、実際に指導教員や同僚学生と過ごすことの意義は無視することができません。また、国際的な視点から研究を行なっている教員にとっても、国外に出かけ、そこでしか手に入らない資料を調べ、外国の研究者と直に意見を交換する機会がないことは、とても歯痒いものです。

そのような中、東北大学は令和4(2022)年度に創立115周年・文系学部が設置され総合大学になって100周年を迎えます。会員の皆様にはぜひ、お時間のある時に大学の関連ウェブサイトをご覧になっていただきたいと存じます(URLは以下の通り)。

<https://www.bureau.tohoku.ac.jp/115anniv/index.html>

上記のサイトでは、東北大学基金グリーンマイルストーンという大学のこれからの道標が掲げられており、その中心施策として、「総合知の輪を世界へ」と「グリーン未来社会の実現に向けた教育・研究」という2つが謳われています。

ます。国際文化研究科は、設立当初より文理融合の研究教育を志向し、学際的研究も積極的に推進し、総合知を持つ人材を国内外に輩出しているところです。グローバルな研究教育ネットワークを構築し、この使命をさらに充実させるため、英語によるプログラムを開設したり、海外の大学に在籍する研究者と業務委託契約を結び、オンラインで本研究科の教員と共同研究を実施することなどに取り組んでいます。また、これも英語プログラムになりますが、「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム」を立ち上げ、持続可能な開発目標、つまり最近よく耳にするSDGsの達成に貢献する人材の養成を行っています。令和3(2021)年度からは、本学の学部生向けの授業「SDGs入門」を提供しています。

さて、上記では大学の115周年・100周年の話をしたが、国際文化研究科に目を向けますと、私たちは令和5(2023)年4月に30周年のアニバーサリーを迎えます。これまでの歩みを簡単に振り返って見ますと、次のようにまとめることができます。

平成5(1993)年：国際地域文化論専攻と国際文化交流論専攻の2専攻体制で発足

平成13(2001)年：別の組織であった言語文化部が合流し、国際文化言語論専攻を新たに設置、3専攻体制に

平成27(2015)年：3専攻から1専攻、18講座を8講座に再編

きれいに10年毎の歩みにはなっていませんが、2専攻→3専攻→1専攻という3つの段階を経て今に至っています(もう少し詳しい説明は研究科ウェブサイト「概要」ページに掲載されています)。これをお読みになっている会員の皆様が国際文化研究科で勉学、研究、業務に励まれているのは、どの段階だったのでしょうか。

研究科では、30周年事業準備委員会を立ち上げ、その30年のアニバーサリーをどのように祝うか計画を立てることにしております。感染症パンデミックが終息するかどうか、今や多くの同窓生が海外に暮らしている、などの事柄を考慮に入れながら、同窓会の皆様との絆を確認し、それをより太くすることができるようなものにしたいと考えています。会員の皆様のお力をお借りする場面も出て来ることと思います。その際は、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

末筆になりましたが、会員の皆様のご健康と益々のご活躍を祈念いたします。

第20回同窓会総会のご案内

第20回同窓会総会を次のとおり開催します。ご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2022年3月9日（水）17時30分～

場所：オンライン開催

国際文化研究科同窓会事務局

第19回同窓会総会と講演会の報告

第19回総会を2021年3月10日にオンラインで開催しました。講演会については、ウイルス感染症拡大防止のため、開催はありませんでした。

第27回公開講座

「国際文化基礎講座」の報告

第27回公開講座「国際文化基礎講座」（2021年11月13日（土）にオンラインで開催）では『「ことば」とヒト～そのとき、脳と心で起きていること～』と題して、本研究科の2教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。



発話準備の脳内プロセスと表記の影響

－漢字とかなで何か異なる？何が異なる？－

中山 真里子（言語科学研究講座准教授）

今年の公開講座は、「「ことば」とヒト～そのとき、脳と心で起きていること～」というテーマで、応用言語講座のジョン ヒョンジュン准教授とともに、言語科学研究講座の私中山が自身の研究チームの研究成果を発表しました。私は、心理言語学を専門にしており、人が言葉を処理するときの脳内のメカニズムを明らかにするための研究を行っています。心理言語学では、人を対象に実験を行いその行動データ（単語認識や単語の読み上げに必要な時間を計測するなど）を検討することで、脳内でどのような処

理が行われているかを推測することができます。今回の公開講座では、発話準備という、言葉を発するために頭の中で行われている処理について、私たち研究チームが最近発見したことをお話させていただきました。

まず、発話準備という処理を説明しますと、これは、言葉を口に出すために、単語の音の塊を別の音の塊にわけて逐次的に処理していくことをいいます。例えば、英語で *He will escort us* と言いたい場合、ヒー・ウィル・エスコート・アス、でなく、ヒール・エス・コー・タスと変換する作業です。（ちなみに日本人にとって英語の聞き取りが難しいのは、ネイティブが英語を話すときには、実際には後者のような音の塊で発音されていることが一因としてありそうです）。この、音の塊の変換時に使われる音の単位は、長らくどの言語でも、一番小さい音韻の単位である“音素”という塊であると思われてきたのですが、10年～15年ぐらい前に、日本語の場合は、音素より少し大きい単位の“モーラ”と言われる塊が使われることが知られてきました。また、中国語では、“音節（シラブル）”というさらにもう少し大きい単位の音の塊が使われることも知られてきました。つまり、言語により異なる音の塊が使われることがわかってきたのです。

これらの学術的背景の下、吉原将大博士を中心とした私たちの研究チームでは、日本語の発話準備に使われる音の塊について、さらに理解を深めようと、発話される単語の表記の影響があるかどうかを調べました：発話される言葉が通常カナで書かれる語（例えば、タクシー）か、それとも漢字で書かれる語（例えば、階段）であるかによって、発話準備につかわれる音の塊は異なるのでしょうか？私たちの実験の結果、発話準備に使われる音の塊の大きさは、実に、その単語が書かれる文字の種類により異なることが示されました。カナで書かれた語の発話処理には、従来通り、モーラと呼ばれる音の塊が使われました。モーラは多くの場合カナ文字1文字に対応しますので、例えば、「タクシー」と発話するときには、タ・ク・…と準備されていきます。ところが、漢字で書かれた語の処理には、漢字そのものの発音の単位が準備されていくことがわかりました。つまり、「階段」と発話するときには、かい・だんと準備されていき、「準備」であれば、じゅん・び、といった単位で処理がおこなわれていることが示されました。発話は、通常表記文字と独立した処理であると思われるため、このようにどのような文字でかかれるかにより発話準備のされかたが異なるという発見は私たちにとっても大きな驚きでした。この一連の研究は、*Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance* という定評のある雑誌に掲載されました。

講演では、専門的な説明が多くなってしまい、難しいという印象を感じたかたもいらっしゃるようで、一般の方にもわかりやすい説明を行えるよう訓練することが、私自身の今後の課題となりました。最後となりますが、心理言語学の中でも私が行っている類の研究は、基礎研究とよばれる、その研究成果が直接社会に貢献する分野です。しかしながら、この基礎研究から得られた知見が、将来、例えば、失語症、失読症や吃音の機序の解明やよりよい訓練法の開発など、応用系の研究にバトンタッチされ、間接的に社会に役立つことを願っています。

References:

- Yoshihara, M., Nakayama, M., Verdonchot, R. G., Hino, Y. (2020). The influence of orthography on speech production: Evidence from masked priming in word-naming and picture-naming tasks. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 46(8), 1570-1589. doi: 10.1037/xlm0000829
- Yoshihara M, Nakayama M., Verdonchot R. G., Hino Y. (2017). The phonological unit of Japanese Kanji compounds: A masked priming investigation. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 43(7), 1303-1328. doi: 10.1037/xhp0000374.

脳から見た効果的な外国語学習法

鄭 嬌婷 (応用言語研究講座准教授)

新型コロナウイルス感染症の流行により、経済、労働、金融、生活など様々なレベルの変化を余儀なくされています。教育も例外ではありません。例えば、教育現場では、学習者同士のやり取りが制限されています。このことは、私たちの外国語学習に悪影響を及ぼすかもしれないのです。なぜなら、言葉が実際に使われる環境に身をおくこと（他者とやり取りをしたり、モノに触れたり、匂いをかいだりなど）は、私たちが言語を学ぶために必要不可欠なことだからです。長年、外国語の単語の意味や文法規則を学ぶため、ドリル、翻訳、解説、暗記などの学習法に頼ってきたかもしれません。これは、子どもが他者とのやり取りを通して言語を獲得する方法とは全く異なっています。これまでの研究から、他者とのやり取りをする学習の有効性と重要性を示す証拠が蓄積されてきています。また、近年の外国語習得に関する脳科学の研究成果からも、他者とのやり取りを通して学ぶことが脳にポジティブな変化が起こることが分かってきました。本発表では、これまで発表者が行った脳科学の研究成果を中心に4つの話題を紹介し、認知神経科学の観点から効果的な外国語学習法はどのようなものかを概観しました。

第一に、場面や状況を見捨て、言語産出練習を何度も行っても、言語処理と社会認知能力を統合し、状況に応じて使える言語能力を伸ばすことはできないことです。効果的コミュニケーション活動のためには、統語、音韻、意味といった言語の要素の処理に必要な言語脳領域と人の気持ちや状況を読み取り、その状況に応じて言葉を選択する社会認知領域の両方が必要です。実際に英語を学習している日本語母語話者が日本語と英語でコミュニケーション課題と単なる状況を記述する言語産出課題を行い、その際の脳活動を測定した結果、コミュニケーション課題のみ、言語領域と社会認知領域が緊密に関連していることがわかりました（図1）。

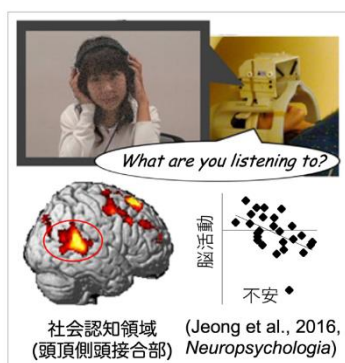


図 1

第二に、言語習得の早い段階からコミュニケーション活動を積極的に取り入れ、使える言語能力を脳の中で訓練が必要です。普段英語の使用に不安が高い学習者は、コミュニケーション課題時に言語行動をモニタリングする脳領域を使わず、コミュニケーション活動の妨げになっていることもわかりました（図1参照）。

第三に、英語でのコミュニケーション時に人と人の相互作用がある方法がより有効だということが検証されました。録画したビデオでのコミュニケーションと実際の人が目の前にいる対面コミュニケーションを比較した結果、対面条件のみ、母語のコミュニケーションと類似した脳活動を行い、英語の流暢性を促進させる効果があることがわかりました。

第四に、文脈やコミュニケーションの中で覚えた言葉は、翻訳で覚えた言葉よりも“使える”ことがわかりました。人とやりとりする場面から言葉を学習すると、感覚・情動・社会認知システムが言語学習を支え、伝統的暗記を中心とする言語学習よりも、概念記憶の定着を促進することが明らかになりました。さらに、学習初期に運動と社会認知脳領域のような非言語システムの関与の度合いが高いことが言語習得の成功を予測することも初めて発見しました（図2参照）。

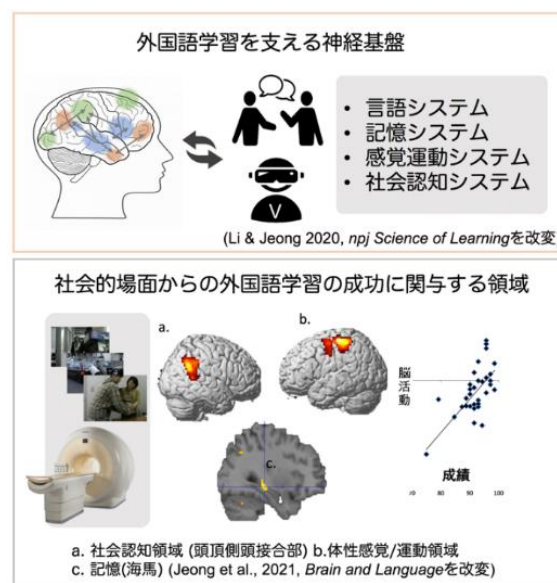


図 2

臨前期や敏感期を過ぎた成人の言語学習は容易ではないと言われていますが、今回紹介した一連の研究を通して、成人の外国語学習も、社会的学習を通じて促進され、母語と同じように習得される可能性があることが示唆されました。デジタル技術の発展により、このような学習が可能になりつつあることから、将来的により効果的学習方法の開発が期待されます。脳科学的アプローチは言語教育分野へ科学的根拠を提供する有効な研究方法であり、一つの学問分野では解決できない言語習得の諸問題を、異分野を融合する学際的研究を通して解決していくことが必要であると考えています。

国際文化研究科主催行事の報告

国際キャリア講習会

池田 亮（国際政治経済論講座教授）

国際文化研究科の主催で、2021年11月27日14時からキャリア講習会が開催された。この講習会では毎年修了生をお招きして、アカデミズムで就職された方には大学での就職活動や現在の研究活動、そうでない方には就職活動や現在の業務のことなどを話していただいている。今年度は、国際環境システム論講座で2011年3月に劉庭秀教授の指導のもとで博士号を取得された、車佳さんにお話をいただいた。車さんは大学院において、東アジア地域における資源循環システムの構築などに関する研究などに従事された。車さんが取締役を務めておられる、株式会社トライメタルズは、循環経済の実現に向けて事業を意欲的に展開されている。参加者は15名を数え、活発な質疑応答が展開された。



～来日20年の経験談～ 研究者の道から経営者への転身

サイクルーズグループ
トライメタルズ株式会社
車佳 (CHE, JIA)
11/27土曜日

車さんはご自身の来日後の経歴を説明された後、同社の事業内容を紹介された。そして何事にも情熱と熱意を持って取り組み、ブレない強固な信念が物事を成し遂げる力になること、さらに出来るだけ多くの人と交流して切磋琢磨することが仕事の幅を広げていくと強調された。

その後、指導教員であった劉教授が、車さんの執筆された論文が今でも頻繁に学界誌で引用されるなど非常に優秀な学生であると述べた。そして、アカデミズムでも十分実績を残すであろうとの思いもあったものの、必ずや実業界で大きな貢献をするだろうとの思いからご自身の知り合いが社長を務められる同社に送り出したことを語った。それに対して車さんは、恩師に恩を返すつもりで日々頑張っているとの思いを述べられた。

質疑応答の際、学生・進路指導委員長の江藤裕之教授からは、外国で働くという決断をなぜ行ったのか、という質問があった。車さんの答えでは、もともと日本に憧れがあり、さらに日本で経験を積みたいという気持ちがあったとのことであった。在学中に学んだ、社会人として役に立った素質は何かという質問に対して、学会発表などのスケジュールを遵守することで計画性を身につけた、また電話一本で全国に赴くような行動力、短時間で大口の契約をするという判断力が培われた、などの点であると車さんは話を

されている。さらに、ご自身が外国で就業されていることを踏まえ、留学生の後輩へのアドバイスとして、日本の風習に馴染むことの重要性を強調された。また、同様に後輩へのメッセージとして、自分の専門に近い方が、就職だけでなく、人脈を作る上でも便利であるとのことであった。

Pcyclus

TM

TML

TM

tricycle

最後のまとめ

★熱意と情熱を持って、夢をかけて走れ

どんな研究や仕事においても、「熱意」や「情熱」を持って前向きに取り組むことが重要です。

やはりブレない強固な信念があると、それが物事を成し遂げる力になります。出来るだけ多く出歩き、多くの人と交流して切磋琢磨をしながら人脈と仕事が広がっていきましょう。



このように数多くの質問が出たことから、参加した在学生は非常に有益な知見を得たと言える。修了生の活躍を実感するとともに、このような修了生と在学生の交流を可能にしている、同窓会の皆様に改めてお礼を申し上げる。



新型コロナウイルス感染症拡大の学生生活への影響調査報告

鄭 嬌婷（応用言語研究講座准教授）

東北大学の行動指針（BCP: Behavior and Conduct Policy）は、2021年4月から2022年3月まで引きあげられたり、引き下げられたりを繰り返しています。新型コロナウイルス（COVID-19）感染症は終息の兆しをみせず、予断を許さない状況が続いています。国際文化研究科学生進路・指導委員会では、研究科が取り組むべき具体的な対応策を検討する目的で、研究科所属の学生がどのような問題や不安を感じているか、研究科にどのような期待を寄せているかを、2021年6月に1回目と12月に2回目、調査しました。本研究科の各講座の学生、及び英語コース（言語総合科学コース[IGPLS]、グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム[G2SD]）所属の学生を対象に行われました。1回目の回答数は、講座学生102名中74名、英語コース学生30名中22名、2回目の回答数は、講座学生99名中79名、英語コース学生30名中28名でした。

主な質問事項は「生活面での不安」「授業・研究活動面での不安」で、2 回目には「就職活動に関する不安」に関しても追加し、調査しました。

その結果、1 回目から 2 回目にかけて、生活面においては不安を感じる割合が大幅に減少していました。長く続いているコロナの状況になれてきたということもありますが、一番の要因は大学や部局からの支援、情報発信、様々な対策なども不安を軽減させたと考えられます。一方、授業・研究活動面では、自宅での研究活動が続いているため研究資料の収集の難しさ、教員及び他の学生とのコミュニケーションの不足に不安を抱えていることが分かりました。これを受け、研究科ではオンラインビデオチャットなどのリアルタイムの個人指導や学生間での親睦活動を増やす活動を強化して参りました。また、留学生は一時帰国ができず、母国での就職活動が困難であること、就職に関する情報収集が難しいことなどから、就職における不安を感じているという回答も複数ありました。

研究科では、今後さらなる生活・心理的サポート、安全で教育や研究活動に集中できるように最大限の対策を続けて推進していきます。

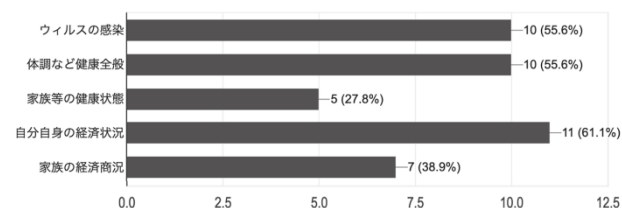
以下、1 回目と 2 回目で得られたアンケートを簡単にまとめました。

(1) 生活面での不安

講座学生

- ✓ 1 回目: 不安を感じる **36.5 %**
不安を感じない **63.5 %**
- ✓ 2 回目: 不安を感じる **22.8 %**
不安を感じない **77.2 %**

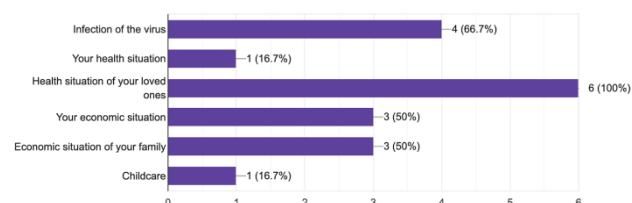
特に生活面で不安を感じる項目



英語コース学生

- ✓ 1 回目: 不安を感じる **18.8 %**
不安を感じない **81.8 %**
- ✓ 2 回目: 不安を感じる **14.3 %**
不安を感じない **85.7 %**

特に生活面で不安を感じる項目

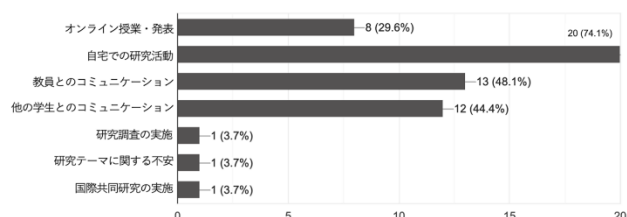


(2) 授業・研究活動面での不安

講座学生

- ✓ 1 回目: 不安を感じる **40.5 %**
不安を感じない **59.5 %**
- ✓ 2 回目: 不安を感じる **34.2 %**
不安を感じない **65.8 %**

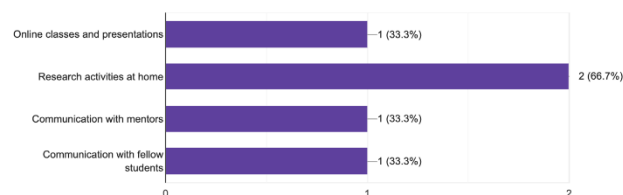
特に授業・研究活動面で不安を感じる項目



英語コース学生

- ✓ 1 回目: 不安を感じる **13.6 %**
不安を感じない **86.4 %**
- ✓ 2 回目: 不安を感じる **28.6 %**
不安を感じない **71.4 %**

特に授業・研究活動面で不安を感じる項目



(3) 就職活動での不安(2 回目のみ調査)

講座学生

- ✓ 不安を感じる **15.2 %** 不安を感じない **84.8 %**

英語コース学生

- ✓ 不安を感じる **10.7 %** 不安を感じない **89.3 %**

特に就職活動における不安に関する自由記述には、コロナの状況により求人自体が少ないことや対面での就職活動が制限されることなどが挙げられた。

「アルムニひろば」同窓生のコラム

CUI HAINING (サイ カイネイ)

(He graduated from the International Graduate Program in Language Sciences in March, 2021.)

I received both my Master's and Doctoral degrees in the International Graduate Program in Language Sciences, GSICS, Tohoku University. My research interests lie in the interdisciplinary field of language communication and brain sciences. Specifically, my research focuses on investigating the cognitive mechanisms of socio-pragmatic expressions using both behavioral and fMRI techniques.



Thanks to the help and support from my advisors and friends in GSICS, I have had a wonderful experience in Japan as an international student and researcher during the past seven years. During this period, I believe I have grown to a better version of myself both professionally and personally. I entered GSICS without knowing anything about life and the graduate-level academic environment in Japan. In the early period of my graduate school, I had difficulty following and understanding some lectures because most of the contents were new to me as I majored in a different program in my undergraduate course in China. Luckily, my professors and lab mates helped me, guided me to find a research direction I would like to pursue, and encouraged me to keep a positive attitude. In particular, my supervisor always supports me to continue pursuing the interdisciplinary research of language and brain sciences. She always mentions that it takes time to grow as a researcher, and good things happen to those who put time and efforts into pursuing their dreams and aims. Whenever I encountered difficulties, these encouraging words always helped me along the way. During my staying at GSICS, the Language Sciences program frequently invites researchers in different fields to give open lectures. These excellent talks have broadened my perspective on sciences and academic life. So, I decided to continue pursuing my academic career at McGill University as a postdoc researcher.

In the coming spring, I will leave GSICS as an alumnus. At the end of this letter, I would like to thank all my professors and lab members in GSICS, and I hope to enter my next career with confidence and pride as a member of GSICS.

姚 新宇 (ヨウ シンウ)

(2021 年 9 月 応用言語研究講座博士後期課程修了)

私は 2013 年の 10 月から、研究生として応用言語研究講座に入学した姚新宇と申します。入学した時、講座名は異文化間教育論講座でしたが、2016 年から応用言語研究講座に変わりました。研究生、修士課程、博士課程、研究員の段階を経て、あっという間、この研究室に 8 年以上いました。応用言語研究講座の先生方、研究室の皆様のおかげで、充実している日々を過ごしています。

応用言語研究講座に入って、研究室の素晴らしい環境、教務係の親切な対応、国際文化研究科の幅広い授業などに感動しました。一番印象に残ったのは、毎週月曜日 16 時 20 分からの応用言語研究講座のゼミです。ゼミでは、発表者は自分の研究内容についてプレゼンテーションをした後、先生とゼミ生はわからないところについて質問をしたり、これからの研究方向についてアドバイスをしたりします。応用言語研究講座の先生たちは幅広い研究分野の専門家であるので、多角的な視点から貴重なコメントをもらうことができます。ゼミで指摘していただいたところを直して、自分の研究が少しずつでよくなるのが実感できるので、非常に達成感がありました。研究生の時から、私の研究についていろいろ指摘してくださった応用言語研究講座の皆様に、心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルス拡大の影響で、2020 年からゼミはオンライン授業になっています。対面のゼミはできなくなるので、最初は違和感がしましたが、今はオンラインのゼミになれています。コロナ禍の中で研究を進めることはいろいろ大変ですが、オンラインで先生のご指導を受けたり、ゼミの皆様と意見交換したりすることができて、本当に良かったです。

現在、私は国際文化研究科で学術研究員をしながら、中国の大学の日本語教師の仕事を探しています。仕事が決まって、応用言語研究講座の皆様とさようならしないといけなことを考えたら、気持ちが複雑になります。中国に帰っても、「研究室の皆様はお元気ですか、今はどんな生活をしていますか」などいろいろ想像すると思います。研究室でいろんな国からの学生と友達になって、いろいろ勉強できて、応用言語研究講座にいる 8 年間は一生忘れられない経験になります。そろそろ応用言語研究講座の学生という身分から中国の大学の日本語教師の身分に変わるので、いろいろ不安ですが、応用言語研究講座で学んだ知識を活かして、優秀な日本語教師になるように頑張っていきたいと思っています。またいつか応用言語研究講座の皆様と再会できることを楽しみにしています。

事務局より

①会員情報の変更・登録について

ご住所・勤務先・メールアドレス等の変更や未登録の方がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報 は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

<int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

②同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>

④東北大学創立 115 周年・総合大学 100 周年記念事業について

東北大学は 1907 年 6 月に創立され、2022 年で 115 周年を迎えます。また、1922 年 8 月には法文学部設置の勅令が下され、2022 年はいわば本格的に「総合大学」としての枠組みが整って 100 周年となります。

そこで本学では、2022 年を「創立 115 周年・総合大学 100 周年」として位置づけ、国内はもとより世界中の同窓生との絆を深め、これからも『知』の成果を通して社会に一層の貢献を行うことを決意し、様々な事業を展開します。皆様の温かいご支援、ご声援に期待します。

(ウェブサイト)

<https://www.bureau.tohoku.ac.jp/115anniv/index.html>

③会費・寄付金の納入のお願い

会則第 11 条第 1 項及び 12 条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：4,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：5,000円 進学者：3,000円

(令和 4 年 3 月現在)

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みください。

郵便振替口座名称:国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号:02220-5-6662